「ハンカチを差し上げようと思いましたが、お別れの印になるので止めました」と言って万年筆をくれた人、黙ってリンゴを差し出した人、『偶像再興』をくれた人などいろいろだった。見送ってくれた人々の前で、私なりの劇的なしぐさとして、高校の白線リボンをポケットから取り出して高々と振り上げた。

東京は月島の木造二階建ての古い寮、その一室が住居であった。朝鮮で別れて以来、初めて父子三人が一緒に暮らすことになった。六畳一間はいかにも貧相であったが、そのころの世間の状態では、不平不満を言う筋合ではなく、曲がりなりにもサラリーマンに戻った父、通学する弟、それに私と三人家族の世帯となった。

「生活」という命題を抱えて上京した私には、胸中を占めていた「若さ」「希望」「学究」そして「情熱」などとは別な思いが加わって、そのための苦悩と混迷とが新しく体を包み込むようになっていった。

昭和二十四年二月、慶応大学通信教育部経済学科に入学の資格を得て、渇望していた「学究の徒」たるの資格を回復して意欲を新たにした。

会社での仕事は変わっていくが、学友との交流は衰えることなく、観念の渦の中で「混迷」「不可解」を楽しむかのような心境には、「進歩」「成長」の兆しは見られなかったが、次第に現実を直視し理解し、ためらいながらも、少しずつ視点は現実的生活を見つめる方向に向いていった。

そしてこの後に、新たな人間模様が、色彩豊かに展開した。昭和二十六年に私は結婚し、「学徒」としての役割は解けて、今日となった。

戦争！　もう二度といやだ！

東京都　水田すゑ

日中平和友好条約が締結されてから、小平の来日や、両国の政、官、財の各国有力者の交流など

が活発に行われるようになった。「これで日中の不幸な時代は終わったのだ」という言葉が現実味を伴って伝わってきたが、日中友好親善という華やかな交流の陰には、まだどれほどの人々が、あの忌まわしい戦争の傷跡を背負ったままに、現在を生きているだろうかということを忘れてはならない。

「戦争」、それによって国家間の勝ち負けはつけられるかもしれないが、その中で栄誉という美名の元に死んでいく兵士も惨めだが、それ以上に悲劇を受け続けるのは、女、子供、病人、そして老人といった多くの弱い人たちであることを、つくづく思ってやまない。

私もその中の一人であろう。しかし私は、父母のとった行動を責めることはできない。これらのことはすべて、戦争という恐ろしくも忌まわしい事態がもたらした災難であり、また苦しみでもあった。歴史が再びこのようなことを繰り返すことなく、私たちの世代だけの暗い思い出として語り継ぐだけで終わることを望むものである。

私は今ここに、戦争というむごたらしい実態を、戦争の何であるかを知らない現代の若者たちに、戦争の悲惨さ、残忍さを語り続けて、もう二度と再びあのような戦争を起こさないように、世界平和のために、残った人生をつぎ込んで努力していきたいと思うのである。

祖国、日本を離れて三十有余年、異国の地満州で敗戦という思ってもいなかった事態に遭遇し、そして自己の意志に反して残留という運命に、大海にゆれる小舟の如くに翻弄されて、その末に九死に一生を得て脱出することができたことは、不幸中の幸いということに尽きる。苦労に苦労を重ねて、生き抜いてきた私は紛れもなく、戦争犠牲者の一人である。

朝に、夕に、祖国をしのびつつ、ノイローゼになるほどに思い続けていた私は、もう生きて再び会うことはできないとあきらめていた肉親たちにも巡り会えて、喜びがかえってきた。まことに波

瀾万丈、起伏の烈しい半生であった。

忘れもしない昭和四十七（一九七二）年九月二十九日、日本から田中角栄首相が、北京を戦後初めて訪れた。その成果は、日中国交正常化という形になって表れた。中国に意に反して残留させられた日本人にも、幸福の光が差し込まれてきた。お陰で私も生きて再び故郷日本の地を踏むことができた。祖国帰還の吉報を得た私は、すぐさま帰国の手続きに全力を挙げて取り組んだ。

しかし、帰国の許可はなかなかおりずに、いらいらすること二年、やっとのことで許可が出て、日本に向かうことができたが、その二年間という月日は、それまで毎日毎夜、日本に帰れる日が一日も早く来ることを夢見ていた三十有余年の月日よりも、はるかに長く感じさせられる二年間であった。祖国日本に帰れるなんて夢ではないかと思うと、あのつらかった三十有余年間のことも、泡となって消えていくような感じがしていた。

厳冬期になると零下三十数度に下がる寒さの厳しい中国での日常生活で、衰弱しきってしまった私の体を心配してくれる息子や、娘に見送られて、帰国の支度もそこそこにして寒さの迫ってきた北京空港を飛び立ったのは、昭和四十九年十二月の初めであった。

思い起こせば、私が満州の地に渡ったのは昭和十四年の春だった。満州の夏は暑く、摂氏三十度以上にもなり、冬はまた反対に零下三十度以下にも下がるという極寒地で、寒気は着ている衣服を通り抜けて直接骨までしみ通るようだった。寒いという言葉よりも痛いという言葉のほうが実感のある表現であった。昼は暑くて、夜は寒いという典型的な大陸性気候である。

渡満してから平穏な生活が数年続き、昭和十七年の春に、私は牡丹江高等女学校に入学したが、家の事情によって両親と離れて姉の家に寄寓して、汽車通学をしていた。

戦時下となり、戦局も段々と激しさを増してくると、女学生生活ものんびりとはしておれなくな

り、学徒動員が始まった。満州各地の女学校も、それぞれ指定された軍の施設や、軍需工場などに動員されていた。私たち牡丹江高女の生徒も、各学年に応じて軍関係の施設や航空機生産工場に派遣された。私たち低学年生は、最初のころは軍の施設で、軍服などの洗濯やほころびの繕い、ボタン付けなどの仕事をしていた。単純な仕事ではあったが、忙しい毎日でもあった。みんなは一致団結していて、「勝利の日までは、がんばろう！」を合言葉にして、お互い助け合い、励まし合いながら張り切って働いた。

三年生になると、牡丹江（ボタンコウ）市内にある電電公社に動員させられた。昭和二十年八月十一日の午後のことだった。

この日は、私にとっては生涯忘れることのできない日となったし、そして私の一生を変えてしまった日ともなった。

ソ連軍の戦闘機が、牡丹江市街に不意に襲ってきて、無差別に猛烈な機銃掃射を加えてきた。市街はたちまちのうちに火の海となり、道端には銃撃を受けて即死した人や、血を流しながら悲鳴をあげている人などがあふれていた。「だれか！　助けて！　痛い！　苦しい！」と叫んで逃げまどう人、「お母ちゃん！　お母ちゃん！」と、子供が母親を捜して泣き叫びながら走り回っているなど、様々な悲鳴が今でも私の耳にこびりついて離れようとしない。

かつて何かの本で読んだ記憶にある、阿鼻叫喚の巷という状態はこんなことを言うのだろう、と一瞬思ったものだった。だれもかれも、必死になって逃げ回っていた。

私は無意識のうちに、三人の汽車通学仲間の同級生と牡丹江駅に停車していた旅客列車の下に潜り込んで身を伏せていた。どうしてそんなところに潜り込んだのか、今思い出そうとしても全然分からないが、正気に返ってはじめてまだ生きていたことを知った。

やっと恐怖心が薄れて恐る恐るはい出て周りを

見ると、列車の窓ガラスはほとんど破壊され、車体もあちこち穴だらけになっていた。後に知ったことだが、この列車は八月九日のソ連軍の不意な越境によって、北満の佳木斯（チャムス）や、斉斉哈爾（チチハル）から着の身着のままで避難した多くの開拓団の人たちを乗せて南下してきた避難列車だった。

車内は血の海と化していて、目も当てられぬ惨状だった。どれほどの同胞が南下中にこのような悲惨な目に遭って犠牲になったのだろうか。何の罪も無い人々が、こんな目に遭うなんてと思うと、怒りで胸が張り裂けるばかりであった。

市街の火災も少しは火の手が収まってきたので、まず家に帰ろうと思ったが、汽車も、バスも全部がストップしてしまったので、帰ることもできなくなった。致し方なく動員先の電電公社に戻ることとした。会社の責任者も状況を十分に理解してくれて、「こうなった以上はどうにもならない。我々と行動を共にしたまえ。死ぬのも生きるのも一緒だぞ！」と、力強く私たちを励まして受け入れてくれた。

今になって思うに、もしもあのときに私たちを受け入れてもらえなかったとしたら、その後の私たちはどうなっていただろうかと、想像するだけでも背中に冷気が流れて身震いがするようだ。

その日の夕方に、南の方に避難するということが示された。みんな青白い顔になったが、一緒の行動をとらないと、どんな災難になるか分からないので指示に従った。私たちは社員の一員となって駅に向かって会社を出発した。

牡丹江駅に待機していた列車に詰め込まれたが、その列車は人が乗る客車ではなく、天井の無い無蓋列車だった。列車は一応ハルビンに向かって出発したが、途中で幾度となく停車した。停車するたびにソ連兵が貨車に乗り込んできて、マンドリンという自動小銃を突き付けては、所持品を検査したり積み込んだ荷物を開いていた。腕時計や、金や、眼鏡や、万年筆などちょっと価値がありそうな品物を見付けると、目の色を変えて無理

矢理に強奪していた。そのうちに略奪する物が無くなると今度は、若い女性を次から次へと引っぱりおろして乱暴狼藉を加えていた。

暴行を受けている女性の悲鳴が聞こえてくると、私も自然と体が硬直して、身震いが起きていた。ひどいのに遭うと、衆人の目の前で堂々と強姦行為をしていた。何とこれが同じ人間なのだろうか？　人間の顔の面を被った獣ではないかと思った。

私たち女学生は、こんな惨いことを目の当たりして恐怖のどん底に陥ってしまい、言葉を発することもできなかった。顔からはあぶら汗がしたたり落ちてきた。男性の片隅に体を縮めているしかなかった。

だれもがこの悲惨な行為に抵抗することができない状況にあった。もし抵抗でもしようものならば一発でやられてしまうからだ。本当に情けない限りだったが、これも敗戦国の女性のたどる運命なのかとも思った。今までは敗戦国の国民という経験も無く、優越した民族ということで、おごり高ぶった行動をしていたが、その反動は厳しかった。

私たちの貨物列車は、途中で何度も止められながらハルビンに向かって南下を続けていたが、もう一つの天災がやってきた。神様は、これでもか、これでもかと試練を与えられた。無情にも雨が降り出し、それが三日三晩も続いたが、私たちの乗った列車は無蓋車であるから当然ながら屋根が無い。しかも着の身着のままでの避難行なので、だれ一人として雨具らしき物を持っている人はいない。みんな頭から風呂敷や有り合わせの布切れをかぶっていたが、どしゃ降りの雨では、そんなものではどうすることもできず、だれもかれも頭からつま先までずぶ濡れの有様だった。それに八月とはいえ、夜になると冷気が襲ってきて、絞れば雨水が流れてくるような体は、寒さでがたがたと震えが止まらない。食べる物も尽きてお腹に入る物も無く、青白い顔だけが並んでいた。

やっとの思いで貨物列車は、新京駅に到着した。新京（長春）は晴れていて久しぶりに見る太陽は、常よりも一層まぶしかった。雨に浸され飲まず食わずのうえに、睡眠もとれずに過ごした三日三晩、それに追い打ちをかけた恐怖と緊張の連続に、みんなは心身共にその疲労は極限に達していて、駅で一応降ろされて駅前に集合したとたんに、地べたに座り込んでしまった。

そこで私たちは、八月十五日の終戦の玉音放送を涙ながらに聞いたのだった。日本国の一億の民が、ただ一筋にお国のためとばかりに命を投げ出して一生懸命に尽くしてきた結果が、思いもよらぬ敗戦という結果によって終わったのだった。

みんな全身から血が引くような気持ちになり、がっかりして座り込んでしまった。中には地面をたたきながら、泣きじゃくっている者もいた。また、この意外な結果に気を失って倒れ込んでしまった人もいた。

しばらくの虚脱状態が続いているうちに、どこからともなく銃声が聞こえてきた。私たち電電公社の避難グループの一同は、残る力をふりしぼって必死になって避難を始めた。

社長は声を枯らし死に物狂いになって、私たちを指導し励まし続けていた。「一人も落伍者を出してはならん、ここまで死ぬ思いをして避難してきたんだ。どんなことがあっても最後まで頑張るのだ。私についてこい！」と、必死の形相をして叫んでいた。社員一同も社長の許を離れないように努力していた。今思えばあのときの緊張感、そして精神力の強さは、何ものにも勝る力であったと言ってよいだろう。

社長は、一同を新京の南湖近くにあった、電電公社の寮であった、北辰寮に向かわせた。新京駅から北辰寮までどれぐらいの距離があったかは記憶に定かではないが、とにかく蟻の移動の如くに行列をつくって歩いて行ったことを覚えている。途中で、「もう駄目だ！　私のことは構わないで、さあ、先に行ってくれ！」と言って、へたへたと

座り込んでしまったままになり、私たちがどんなに励ましても動こうとしない人も出てきた。
しかし、ここまで行動を共にして避難してきた同胞を、どうしてこの期に及んでここに置いてきぼりにすることができようか？　当時の日本人はまだ団結心が強く、同胞愛も固く、「死なば、諸共に」という気概も旺盛だったので、だれ一人もそのまま置き去りにして行くことはなかったが、みんな体力が極度に低下しているので、二、三人掛かりで抱き起こして連れて行った。
日暮れごろになって、やっと目的地の北辰寮にたどり着いた。寮では、六畳間に六、七人ぐらいずつ分けられて入った。二階建ての大きな寮ではあったが、何分、千人余りの人数なので、ぜいたくなことは言ってはいられなかった。
男性社員は、ほとんど召集されていたので、電電公社グループの避難民は、交換業務に従事していた女性社員を中核として、召集社員の家族たちが主で、女、子供、そして老人ばかりだった。みんなは、割り当てられた部屋に入り何日ぶりかに畳の上で横になったり、伏せたりしていたが、疲れが急に出てきて自然に寝込んでしまった。やっとのことで落ち着きを取り戻した安堵感からか、避難中のあの非人間的な顔付きをしている人は、もうだれもいなかった。
寮の一階の中央部には、広い食堂と炊事場があった。私たちは、一日二度の食事をこの食堂で食べることになった。もちろん白い米のご飯は、望んでも望めなかったが、高粱（コーリャン）と米とが半々の食事だった。何日間もの飲まず食わずの空きっ腹には何を食べてもおいしかった。あのときの味は今でも忘れることはできない。
人数が多かったので、食事は一遍では済まされずに、三班に分けられたが、それでも腰掛けて食べることのできない人もいて、立ったままで食事をとる有様であった。
そんな生活も、二カ月が経たないうちに、お米が手に入らなくなり、高粱や、粟ばかりのご飯と

なってきた。それが原因となって胃腸を悪くする人が増えて、老人や小さな子供たちの中には、余病を併発して死んでいく人が出てきた。さらに衛生状態も段々と悪くなり、発疹チフスや赤痢などの伝染病が発生し始めた。寮長の表情は、あの避難中のときと同じように厳しくなっていた。

千余人分の食糧といえば大変な量で、それを買い出しに行く人も容易なことではなかったであろう。寮長は、私たち避難民のために、「日本に全員が無事に帰れるまでは！」と、あらゆる方面に対していろいろな手だてをして努力をされていたが、三カ月足らずでついに、北辰寮での共同生活は終止符を打ち解散することとなった。それからの食べることは、各人でそれぞれ自炊自活をすることになった。

当時、私は寮の事務所で会計係を引き受けていたが、共同生活解散、そして自炊自活となると、私も失業することとなり、同時に自分の食事は、自分で賄わなければならなくなった。しかし、炊事道具は何一つないので、食事を作るにも作りようがなく困っていた。

そんなとき、二階に住んでいた故郷が私と同郷という夫婦の方が、私の分も一緒に作って下さるというご親切極まりない温かい申し出をいただき、私は感激して涙があふれるばかりであった。

この逆境の中において、自分たちだけでも大変なことなのに、他人である私にもこんなに親切な救いの手を差し伸べていただくなんてと思い感謝をした。その夫婦には三人の子供がいて、一番下の子供はまだ生まれたばかりだった。

私は、何の手伝いをすることもできないので、せめて子守りでもと思い、毎日子守りや、食事の支度、そして洗濯などを手伝っていた。私の命の恩人と言っても過言ではなかった。

自炊だからといって白い米のご飯が食べられるわけではない。たとえ多少の蓄えがある人でも、当時はぜいたくなことはできるはずがなかった。なぜならば、いつ日本に帰れるか分からなかった

から、少しでも食い延ばさなければならなかったからだ。

当時の中国人がよく、「日本人吃高粱米没法子」と言っていたが、これは、「日本人が高粱の飯を食べるということは、他に方法がないからだ」という意味だが、まさにその通りであった。

この言葉は、それまでの反動として、中国人が日本人に対して軽べつの意味を現しているのだ。「ざまあみろ！　悪いことをするといつかは罰が当たるのだ。この際に敵討ちをしてやるぞ、忘れたか？　日本は中国を不法にも占領し、中国人はそれによってとんだ災難を受けた。殺人、強姦、焼き打ち、そして土地を奪われ、権力までも……。そして十数年間、中国人は奴隷として扱われたのだ。お前たちにもその苦痛を味わってもらおうではないか」という、今までの恨み、つらみを投げかけている言葉であった。

私は、確かにそうかもしれないと思ったこともあったが、また、しかし、私たち一人ひとりの日本人には、何の罪があるのであろうか？　とも思い返したことであった。

このような時代に生まれてきた私たちは、本当に不幸だった。ましてや異国の地でこんな扱いを受けてと、世を恨んだこともあった。いっそのこと、このままここで死んでしまおうか？　と考えたことも幾度かあったが、その度に両親、兄弟、そして姉妹などの肉親の顔が目の前に浮かんできて、「する！　死ぬなんて情けないことなんか考えるのではない！　一日も早く帰国することだけを考えなさいよ！」と、励ましてくれた。私も、その度に「そうだ！　家族みんなが、私の無事に帰ってくるのを待っているのだ！」と思い直しては、涙を流すのだった。

しかし、いくら待っても引揚げという話は伝わってこなかった。北辰寮での避難生活は日増しに病人も多くなってきた。医者もいない状態では、いったん病気にかかったらもうどうすることもできなかった。成り行きに任せるのみで、次々

と死者が出てきた。寮の庭に大きな穴が掘られて、日ごとに増えてきた遺骸をその穴に放り込むのだった。葬式らしいこともできないまま薄っぺらなむしろ一枚でくるまれたままの姿であった。

苦境の中にまた苦境、とうとう一番恐れていた冬がやってきた。満州の冬は想像もつかないほどの寒さだった。寒いというより冷たくて痛いのだった。零下三十度を下回る酷寒の中をどうやって生きていくのかが最大の問題だった。

ただただ、迫ってくる死を待っている外に方法がなかった。寒さが加わるごとに死者も増えてきた。今日は私か？　明日は我が身か？　そればかりを考えて過ごしていた。引揚げの知らせはまったくこない。どうすればよいのか、皆、途方に暮れて毎日を過ごすのみだった。

だが、いかなることになろうとも生き抜かなければならない。生き抜くために、言葉も通じない中国人の妻になったり、子供を中国人に売ったりしていた。ひどい話になると、我が子を殺したりした。ある女性は、いやいやながらも、ソ連兵と交際を始めた。それぞれに皆、生きていくためであった。

そのころは、寮内にいる女性たちは、顔に鍋底のすすを塗ったりして、寮の地下室に閉じこもり、一歩も外に出ようとはしなかった。もしも、日本女性と分かったらどんな目に遭わされるか、みんな知っていたからだ。

ところがある日、運悪く独身の女性が、ソ連兵に見付かってしまい、彼らのところに連れて行かれてしまった。寮の人々も心配していたが、どうしようもなかった。五、六時間も経ったころ、真っ青な顔をして戻ってきた彼女は、転げ込むようにして部屋に入るなり、「もう！　死んでしまいたい」と、大声で泣き叫んでいた。聞いていた私たちも、慰める言葉もなく、ただ悔しさに共に涙を流すだけだった。彼女はその夜半に、自殺をしてしまった。

このように犠牲になった女性が、どれほどいた

か、その悲惨さ、残酷なことは筆舌には尽くせないものである。

敗戦と同時に親子心中したとか、二十人、三十人という集団で手榴弾による自爆とか、さらには、手渡された青酸カリを飲んでの一家自殺など、身につまされることは枚挙に遑がない。それ以外にも様々な悲劇によってあたら大切な命を無くした人々がいるが、皆、国の罪を背負って死んでいったのではなかろうか。

それからの私の運命、生きざまは、ここに記すことはできない。それまでの私は、死んでしまったのだった。それまでの私とは別の人格の私は、三十有余年を異郷の地において虐げられつつ生き長らえてきたのだった。

一口に三十有余年と簡単には言えるが、この間、異国に残された日本人がどんな目に遭わされ、どんなひどい仕打ちに耐えていたかは、敗戦国日本にいた人たちには想像もつかないことであろう。

戦勝国の中国であっても、国共内戦という動乱の巷から、文化大革命という混乱の世代を通じて、かつての敵国人であった日本人が普通に生きていくことは、並大抵のことではなかった。特に、私たちと同年代の人々にとっては、二度と再び帰りこないあの素晴らしき青春時代を、ただただ苦痛と、そして悩みのみで過ごしたのだった。

不幸中の幸いというか、私は命があって再び夢にまで見ていた祖国日本の土を、この足でしっかりと踏むことができて、牡丹江高女時代の恩師や、懐かしき同窓生の皆々様と再会することができた。このことは、私の人生においてこのうえもない幸福と感謝している。

これからも、失われた青春を取り戻すために、残された短い年月を大切にして思う存分楽しく過ごしていくつもりでいる。帰国後、日本に呼び寄せた主人と長男家族と共に、苦楽を分け合って日本での平和な生活で一生を終えたいと思っている

毎日である。

戦争で失われた青春

神奈川県　須藤卓雄

一　生い立ちから渡満まで

私は、大正十四（一九二五）年十月に山形県の日本海側にある鶴岡市で、須藤家の次男として生まれ、両親と五歳年上の兄との四人家族で、平凡な家庭の普通の子供として育てられました。

昭和十三（一九三八）年の春、地元の尋常小学校を卒業して、県立鶴岡中学校に入学しましたが、同時に兄は鶴岡中学校を卒業し、ストレートに第一高等学校に合格していました。そのころが我が家にとっては、至福の時代でした。しかし、それも束の間のことで、間もなく母が乳がんになり、手術をしましたが、とき既に手遅れで、幾月も経たないうちにがんが体内のあちこちに転移していて、何度も入退院を繰り返していました。東京のがん研にも行って診てもらうなど、八方手を尽くしたのですが、薬石効なく、家族の願いも聞き届けられずに、昭和十五年一月にとうとう他界してしまいました。

それに伴って父は満州に行くことになり、兄は東京の一高の寮に、一人で鶴岡に残る私は市内で下宿生活と、三人が三様でそれぞればらばらになって、一家離散することになってしまいました。それ以後、この三人が一堂に会するということは、とうとう訪れることがなかったのです。

そのようなことで、鶴岡で下宿生活をしながら中学生生活を送っていた私ですが、昭和十七年八月、五年生の夏に、当時の過酷な勤労奉仕と、気ままな下宿生活との相乗作用によって、肋膜炎と肺浸潤を併発してしまい、東京の清瀬町にあった療養所に入り、療養生活をするようになってしまいました。

当初の診断では、一年の療養によって退院し、